

はザラで、沖縄や大陸で戦死した家はアソコモココもで、生きて帰ったことではばらくは肩身の狭い思いもしました。

航空兵の復員を急いだのは、占領軍の日本上陸時に、航空隊員が自爆する危険が大いにあったので、復員第一号を航空兵、特に特攻隊の生き残りに当てたのが真相のようです。

## トラック島の航空整備兵

大分県 羽田野 正士

大分県豊後大野市池田で、大正十三（一九二四）年十二月に出生。家業は農業で、昭和七（一九三二）年四月に大恩寺尋常小学校に入学、昭和十四年三月高等科を卒業、その後、家業を手伝いしながら青年学校に通っていました。

戦争も始まり、我々の生活も世相も軍国調になりつつあり、昭和十八年四月二十日に佐世保第二海兵団に入団して、同日、海軍二等整備兵を命ぜられました。そして三カ月の海兵団での初年兵教育を終えて、同年七月五日に海軍一等兵として大村海軍航空隊付きを命ぜられました。

ここで二カ月勤務、九月六日に第五五一海軍航空隊付きを命ぜられ、大東亜戦地外戦務（加算率）一カ月を付され、九月から十月は五五一空にて戦務丁（木更津基地）を付されました。

昭和十八年十月十一日、南西方面に向かうこととなり、横須賀を発ち、内南洋方面に向けて転進、翌十九年一月にコタラジャを発ち、さらに二月十一日にトラック島の竹島飛行場勤務となりました。

(トラック島は、我が国の絶対国防圏上の要衝であり、長く連合艦隊司令部及び艦艇部隊主力の所在地であった。マーシャルの失陥以来、敵の空襲を予期した連合艦隊司令長官は、水上部隊を内地、パラオ方面に撤退させ、同地区の指揮は第四艦隊司令長官となった。しかし同長官が米軍の反攻に対する新迎撃態勢を確立しないうちの二月十七日、敵機動部隊の来襲となった)

二月十七日でした。大空襲があり、警報が鳴り渡り、空前の大空襲には言葉では表現できないほどでした。上空には百機以上の米軍機が舞う有様は何にもたとえようがありませんでした。

それに、三日後の二月二十日には、ラバウルから日本のゼロ戦が十数機が来てくれました。敵艦の姿も見えなくなり、大空襲も終わりました。そ

こで私たちは、本隊のあった楓島へ帰り、飛行場の整備と拡張工事を急ぎました。

そのころから食料の補給はなくなり、自給自足の準備にかかりました。さつま芋の作付けをするやらパイヤを栽培したりしていましたが、珊瑚礁からなる土だから野菜は出来ない。そこにグラマン戦闘機が飛来して、練り返し十キロ爆弾などを投下した。このため食料不足はますますひどくなり、死亡するものも出るようになってきました。しかし生きるためには食料を見つけねばならず、現住民は椰子の実を食料として、人間一人に椰子十二本もあれば一年間の生活ができるといえます。また現住民はカヌーで椰子の実を持ってきて、物々交換にやってきました。タバコの葉を作付けして、それを持って交換できるようにしました。あるときよりアミーバ赤痢が流行して、現住民もアミーバで死ぬものも多くなり、我々の多くもこれで苦しみました。私も最初は脚気になり、次いでアミーバ赤痢に罹りましたが、入院一週間で

退院することができました。

人間は食料なくして一日として生きてゆけません。度々入院、退院の繰り返しで、昭和十九年十一月一日付きで海軍上等整備兵を命ぜられ、十一月十五日、第四艦隊に編入されました。

昭和二十年四月十七日、再びアメルバで第四海軍病院に入院しました。そして五月一日には海軍整備兵長を命ぜられ、同月二十六日、入院中に全治して退院、終戦後の九月一日、海軍二等整備兵曹に任ぜられました。

昭和二十年十一月七日横須賀海軍鎮守府収容所に向け輸送艦「楠」に便乗してトラック島を出発しました。出発に当たり、多くの亡くなった戦友を葬るのに、穴を深くは掘れない土地でしたので、頭を踏まないようにパイヤとか椰子の苗木などを植えて葬るのが精いっぱいでした。そして戦友たちの安らかな天国への旅立ちを念じながらトラック島を後に出発したのです。

輸送艦「楠」の乗船者は百人くらいでした。途

中、台風に遭い、波が高くて船が流され、いつときはどうなることかと心配するほどでしたが無事、浦賀に着き、上陸、復員手続きを済ませて無賃乗車券をもらい、東京駅から九州へ入り、豊肥線で大分に帰りました。

途中、車窓から爆撃を受けた内地の都市の悲惨な光景を見ながら我が家に帰りますと、明治生まれの祖母キヨが大変喜んでくれました。両親の姿が見えないので聞きますと畑に行っているとかで、やがて両親も帰ってきて、お互いに元気で、無事を喜びあいました。しかし多くの戦友のことを思うと涙が止まりませんでした。

戦後、我が家は三反歩という小農家で、農業では食って行くのが大変で、農外収入を得なくてはなりませんでした。それで家族八人は一生懸命働きました。

今、若い者とは別居していますが、孫三人の顔を見るのを楽しみに、妻と二人で余生を過ごしております。